

## 合宿共同授業で考えたこと

山 田 勇

中国・四国地区共同合宿授業に参加した関係で編集子よりこの行事のあり方についての感想を求められた。今後同セミナーの運営を円滑に行う上での提言をして欲しいとの事だったように思う。ペレストロイカとは、筆者の専攻するロシア語で、各種の改革を意味するが、最近では現ソビエト政権もこれが一筋縄ではゆかぬことを悟り始めたやに聞くが如く、すでに運用されている合理的であるとされるシステムをドラスティックに改めるなどということは気の重くなる仕事である。あまり不都合が生じさえしなければ目をつぶりたいのが人情というものであろう。共同合宿授業が曲がりなりにも無事に終了した今、この事で何かを申し述べるとすれば、この際、セミナーで筆者どもに課せられた課題がその運営方法との関わりで、どれほど学生諸君に理解されたかを些かでも検証しておくことはそれなりの意味があろう。

本年度のセミナーでの連続講義のメインテーマは「国際社会——過去・現在・未来——」であった。聞くところによれば、この1・2年、このテーマが定着しているという。我国が急激な経済成長を遂げて、海外との関係が一層緊密になるに従い相手国との各種の摩擦が深刻化してきており、教育の場でも帰国子女の教育など実態の様相が複雑化してきたこうした問題に対処できる体制が求められるまでになった現れと言

えよう。この5日間に行われた講義の内容であるが、大別すれば、

- ① 我国で比較的情報の少ない異文化圏の実相に関わるもの
- ② 国際化現象を「理解」という観点から捉えなおし異質なものに対する洞察のすべを論じたもの
- ③ 我々に身近な、学術分野における交流協力に見受けられる問題点

等が取り上げられた。「国際化」という従来の学問の狭い枠では律しきれぬ複合的テーマに対して、些末な事実の羅列で対処しようとしても、かえって事の本質を見きわめ難くするものであるが、そういった意味からもテーマ②に関する講義が幾つか設定されたのは大変有効であったといえよう。聴講生の反応は圧倒的にテーマ①に属する一連の講義に対して好意的であったようではあるが。

この講習会では講師も他の先生方の講義に参加する習わしであると申し渡され、我が身を省みて気分が重かったがそれでも幾つか聴講させて戴いた。講義では世界各地、殊に我々にとって日頃ともすれば情報の少ない地域であるアジアの、そしてアフリカからの人々の息吹きが感じられる内容の報告がなされた。一コマだけの短い講義時間なので各講師ともその構成にはいたく心を配られた様であるが、日頃筆者が関わっている分野と異なる地点での人々の営為に新

鮮さを覚え、異文化に関する視点が突に多様にあることを実感せざるをえないセミナーであった。講師の方々のご苦労も大変なものであったと思うが、聴講生は本年度のセミナーをどの様に受けとめたであろうか。

ある学生は「自分の体験から国内にいても地方対地方という異文化経験を言葉や習慣に関して味わった」と述懐し、またある学生は「今や日本人、外国人という区別が意味を持つ時代ではなく、我々は寛大な心で世界に目を向けなければならない状況にあると認識するまでになった」と述べている。前者の如き心情はこの「合宿」を相互理解の一つのモデルと捉える多くの学生に共通したアナロジーとなっていたように思うが、民族性の違いを認識の対象にすえて「他者」なるものの理解を深めることが求められた本セミナーの主旨からすれば、問題の所在の整理をもう一度踏み込んで、しっかりしておくことが肝要であろうか。この辺りに「共鳴しあえる部分を共鳴させることは難しいことではない。異質のものへの拘りこそが理解の第一歩となろう」と鳥取大の北村氏をして慨嘆させた原因があるのかも知れぬと思ったことである。またこの短時間に「仏のみ心」まで悟ってしまった君には、後はひたすらその実践に精進するよう期待したいものである。とかく我々日本島民は、国際社会で生ずることを他人と他人との関わりという観点から捉え直し、正しい価値判断ができる知識と経験がありさえすればその場で生ずる事態に全うに対処できる筈であるといった楽観的な態度に陥りがちである。"外国人から日本語の「文法上の性」について質問されて返答ができなかった"り、あまつさえ"漢字につ

いて誤った知識を教えて、その人からたいへん憤慨され"た経験をお持ちの方には、お気持ちをお察し申し上げるより方法がないのである。

隣のことが気になって仕方のない我々の悲しいさが今更云々されても、そう一朝一夕に改める術も持たない訳だが、参加者の中に「外国で日本人は日本人同士で固まる傾向があるがこの合宿でも見事にそうした傾向がでていた。」と椰揄出来るまでに学習成果を披露する者もあった反面、「この合宿であまり先生や他校の学生と交流ができず残念だった。相互理解という意味では我国も自分のことを知らせる努力が必要だと感じたし、我々ももっと日本について知る必要があると思う。」と正しい視点に立ちつつも、その反面合宿交流を国際化概念に結びつけてしまう短絡的思考も見受けられ問題の根の深さを目の当たりにした次第である。「外国人とお互いに理解し合うことも、自国の人々と理解し合うということも、結局は同じではないか」と自分に言い聞かせてみてもそれは異文化問題からの逃避に過ぎず、事態は一向に解決しないのである。本来、人は皆個性を持つ存在なのであって、ここは問題の本質をそうした個体差に矮小化してよいものかどうか、もうそろそろこの種の"うかつさ"を返上してもよい頃だと思っただが。尤も、このように申したからといって、暑い盛りに参加を申し出た異文化受容に熱意ある受講生を責めることに繋げるつもりはなく、寧ろこの辺りにこのテーマに対するセミナー運営上の限界のようなものを感じている次第である。本年度の中国・四国地区国立大学一般教育研究会では「国際化の意識は学生の間でも年々高まっており、彼らは外国でのホームステイ

や会話中心の語学を希望する割には、自ら外国の事をそれほど知ろうとはせず、日本にいる外国人留学生との交流も避けがちである」という事が話し合われたとのことである。(一般教育研究No.34)学生の現状が然りであるとするなら、まだ教いがあるというものであろう。その意気込みを買わぬ手はない。

元来、本セミナーは日頃個々の大学では聴講できない、一般教育ならではの時代の波を鋭敏に反映した、狭い専門性を越えた学問の復権を求めるテーマを軸にカリキュラムが編成されてきたように承知している。そのような意味合いで計画される本セミナーで、「国際化」というテーマを掲げるのに、参加者が日本人講師や学生だけというのも如何なものであろうか。もし各大学が受け入れている留学生が僅かながらも、何らかの形でセミナーに参加していたら、またそうした「講師」が助言を与えれば講義の後で持たれた討論会の活性化がおおいに計れたように思う。それが取るに足らぬ程の交流であったとしても、各種の情報交換によって、例えばドイツに留学された教官の何やら難しかった「西欧の硬質な個人主義に依存しない現在の日本の経済的発展は西欧型産業社会とは異なるイデーのもとに成し遂げられた」なる指摘の真意に万分の一たりとも迫れた様に思われるのである。

小生は講義でギリシャ正教の宣教師キレルとメトディーの事績の、我々が置かれた立場から眺めた今日的意義を考えてみた。彼らはその語学力もさることながら、当時のヨーロッパの政治情勢を正しく把握した複眼的思考に裏打ちされた強かさでスラブの人心を掴み、彼らの文化を掘り起こし「ス

ラブの使徒」たりえた。今日決して経済的に豊かではない東欧諸国で開催される文化セミナーはこうした先人達の遺訓に従った文化に対する地道で偉大な投資であると言える。

異文化の交流は本来摩擦から始まることを率直に認め、その前提に立って、むしろ日頃から自国の文化の紹介に対する労を厭わぬ姿勢は欧州の、それも小国の人達に求められる切実な生活の知恵なのである。真の国際化とは人が人に対して心を開ききることだとするなら、日本人はとかく以心伝心という考え方に傾き易いので、異質な文化的背景を持った人達に接すると問題の所在を確認するだけで手間取ってしまう。目下、何にも増して心のベレストロイカを求められているソ連の人達の様だ。

今回セミナーに参加した若者は幸いにもそうした問題の原点に触れたのだから、持ち前の思考の柔軟さを発揮して欲しいものである。

我々が他者との意志疎通をはかる場合、有力な手段は言葉であり、相手が外国人なら双方が理解できる媒介言語が必要となる。外国語教育の目的の一つはこの情報伝達の媒介手段としての言語運用能力を高めることにある。ところで最近、米国で学ぶ我国の若者の中に現地での生活に挫折して心身ともに疲れはてている者が急増しているとの報告をよく耳にする。アメリカで学ぶことを決意した位だから、人種差別や彼らのyes, noをはっきりさせる気質などは覚悟の上であろう。してみると、これは彼らが母国で言葉の問題をどの様と考えていたかを物語っているとは言えないだろうか。ある程度の水準を維持していないことには相手の事を考える余裕も生まれな

あろう。世間の人は語学の先生ではない。どの世界でも同じであるが、学校というところはモラトリアムを許してくれる環境にある。ロシアの作家よろしく「私の大学は浮世だ」と決め込むならそれなりの覚悟がある。米国では移民を受け入れるだけのコンセンサスはあるが、それがための条件も又厳しい。移住してきたばかりの学生が、『自分の英語がお国の母語訛でつらい』と移住先の大学のクラスでこぼすほどだ。ここには異国の市民権に倣って母語を厭わなければならぬ悲鳴が響く。国際化とは大変手間のかかる知的作業であるらしい。セミナーに参加したある学生は「今回の講義で相手の立場を考え理解しようとす努力する

と共に積極的に自己表現もしながら、人間としてのつきあいをすることが国際社会において相互理解を深めるのに必要だと感じた。考えてみればこれは日常生活における人づきあいにも通ずるはずだ」と講義を振り返ったが、これを全うに実現する作業は、我々にとってことほど左様に容易ではない。その先々に経験を積みねばならない事柄が多々現れよう。

異質な文化の共存を認めた上での共同社会の成立。

セミナーを振り返って何と骨の折れる宿題を戴いたことかというのが偽らざる実感である。